

【雁は松明を標に】

登場人物

曾我十郎祐成

曾我五郎時致

河津祐泰

伊東祐親

工藤祐経

四郎丸

お万

満

火舐

蘇芳

一幕【一場】

建久4年：裾野。

四郎丸、あたりをうろちよろして座る。

蘇芳　ん？そこのお前。なにをしている。

四郎丸　え？俺か？

蘇芳　そうだ、おぬししかおるまい。

四郎丸　今日の巻狩はお偉いさんがたくさん来たから辺りを
見回ってろって頼朝様が。

蘇芳　左様か、他の者は見回りもせず酒を飲み寝ておるとい
うにお主は偉いのう。

四郎丸　へっ。何も偉いものかよ。俺のようなどこの馬の骨とも
分からないやつあ、働かないとおまんま食えないのよ。

蘇芳　ほう、なかなか苦労しておるようだな。
そなた名はなんという。

四郎丸　おっちゃん。まずは名乗るのが道理では？

蘇芳　おお、これは失礼した。
某は蘇芳と申す。

四郎丸　蘇芳。あんた頼朝様の家来じゃないな、どこの人だい？

蘇芳　某はこの宿場を手配した者でな。
今宵は頼朝様もいらっしやる故なにか手抜かりが
ないか見回りをな。

四郎丸　なんだ、おっちゃんも俺と似たようなもんか。

蘇芳 それもそうだな。

(二人笑う)

蘇芳 それで？

四郎丸 うん？

蘇芳 おぬしの名は？

四郎丸 ・ ・ ・ 四郎丸。

蘇芳 四郎丸。奇遇だの、ワシの幼名も四郎という。

四郎丸 へっ、そうかい。だが名前など意味ないさ。

蘇芳 なぜだ？

四郎丸 俺たちのような輩には名前など必要ないのさ。

蘇芳 そうか。

四郎丸 あ、誤解しないでくれ？

俺は名無しのままでもいいのさ。
その方が楽だよ。

蘇芳 おお、強く生きておるなおぬし。

四郎丸 なに、こんな時代だ。いつ死んだっておかしくねえよ
だが親も知らない、身寄りもない。なにも怖くないさ。

蘇芳 何も怖くない、か。

四郎丸 さてつと。そろそろ他も見回るか。

蘇芳 そうか引き留めて悪かった。

四郎丸 なに、気にするなって。じゃあな。

(四郎丸ハケ)

蘇芳 さて・・・そろそろか。

武士(声) 曲者はどこだ！まだ見つからんのか！

蘇芳 いやいよか。今参りませぬ・・・

一幕【二場】

舞台中央に曾我兄弟。
その周りを工藤祐経、その家来が囲んでいる

時致 おお、兄上。見よ：雁じゃ、雁の群れが見える。
時致もすぐいく。兄弟仲良うあの雁のように：
父上、母上は待っていてくれようかの：

祐成 お、おお・・・
時致、私にも見えるぞ、父上、母上も共におる。

時致 兄上、まこと母上に早すぎだと怒られるな。

祐成 は、はは・・・そうだな。
母上は怒ると恐いからなあ。

(祐成事切れる)

時致 母上の事は兄上に任せて時致は逃げることに
するかのう？のう兄上？

兄上？・・・あにうえ。

武士 まさかこの騒ぎを起こしたのがたった二人だということのか。

武士② もう逃げられんぞ！

武士③ このような騒ぎをおこしてただで済むと思うなよ！

時致は腰から赤木柄の短刀を出す

武士② き、貴様！この期に及んで！

武士② うっ(刀を向けられる)

時致 忘れるな。我ら兄弟の思いを。

笑え。大いに笑え。愚かな兄弟と笑え。
そして伝えよ。

武士ゆっくり刀を振り上げ暗転

一幕【三場】

場面変わり、小田原のある丘。

時致 おお、兄上。見よ：雁じゃ、雁の群れが見える。

祐成 時致、雁は何故群れで飛ぶか知っておるか？

時致 兄上！それくらいこの時致でも知っておる！
一羽では危ないからであらう。

祐成 ははは、それもあるが理由は他にもあるぞ？

時致 何故じゃ？

祐成 それはな、親の背中を追いかけておるからよ。ほれ見よ。
群れの先頭におるのが親雁じゃ。

子供の雁は親雁が先を飛ぶから安心して飛べる。
雁も親の背中を追うものじゃな。

時致 では時致もあの雁の様に兄上の後を追うぞ！

祐成 なに？わしがあの雁ならお前はその後ろの後ろの後ろの雁じゃ！
まだまだこの祐成は追い越せぬわ！

時致 な、なに！兄上などすぐ追い越してやるわい！

祐成 言うたな？こいつ！

時致 い、痛い！痛い痛い。やめぬか兄上！

祐成 ……。

時致 兄上？

祐成 時致、決めたぞ！俺は父上のような男になるぞ！父上のように強く、優しい男に。

時致 父上？父上はどのような男だったのだ？

祐成 ん？そうかお前はあまり覚えておらんか。

父上、河津祐泰はな、強くて、優しく、皆に愛されておった。
あと相撲が強くてな！
河津掛けという技を編み出したくらいじゃ！

時致 そうかそのような父であったか。

祐成 しかしその相撲もとうとう勝てぬうちに父は逝ってしまったがな。

時致 兄上……。

蘇芳 おお、祐成様、時致様ここにおられましたか。
奥方様が心配されておられますよ。

時致 おう、蘇芳か。なにそんなに経っておったか。

祐成 蘇芳、よくここがわかったな。

蘇芳 え？それはもう探しましたとも。
せめてこの蘇芳めには行先をお伝えくださいませ。

祐成 ははは、蘇芳もこのような自由奔放な兄弟のお世話は
気苦労するであろうな。すまぬ。

蘇芳 何を申されます。父祐泰様が亡くなられて
奥方様より息子たちを頼むと、
某のようなものに頭をさげられました。
この命は、お二人の為に。

祐成 蘇芳、我らが幼少の頃よりそなたには世話になっておる。
そなたはわれらの家族じゃ。

時致 そうよ、時致は父の顔も覚えておらぬ故、蘇芳おまえは
父のようなもの。感謝しておる。

蘇芳 なんと、もったいない。
この蘇芳お二人から片時も目を離しませぬぞ！

時致 蘇芳、それでは息がつまる。

蘇芳 では時致様は夜の廁の時だけお供いたしましょう。

時致 蘇芳！それは言わぬ約束のはず！それにそれは子供の頃の
話じゃ！

(祐、蘇二人笑う)

時致 まったく子供扱いしおって。

祐成 さて、では戻るとするか。

時致 …あ。あの時致の雁が、兄上の雁を抜き追ったぞ！

二人笑いながら退場。

一幕【四場】

武士　むむむ。

これを・・・ここへ。

武士②　そこでよろしいのか？

武士　うむ！窮地から転じる一手お見せしようではないか。

武士②　王手。

武士　え！？そんな馬鹿な！ま、待った。やはりここをこう！

武士②　そこはほれ、角が待ち構えておる。

武士　く！ならばこう！

武士②　はっはっは。そこは桂馬が。

武士　うおおおおお・・・。

武士②　もう終わりでよろしいかな？

武士　ま、まで！

武士　これを・・・こう。

武士、自分の駒を相手のおでこに当てる。

武士　王手！なんちやって。

武士②　・・・オホン。○○殿。ふざけるのもいい加減に・・・

時致　もどったぞー！あー腹減ったの！

（登場）おう、お前たち。ここで何をしておるのだ？

武士② 時致様、聞いてくださいよ。この男がね・・・

時致 あー腹へったあ！何かないかのぉ（ハケ）

武士② と、時致様？聞いてない・・・

時致 （登場）握り飯を見つけたので時致はこれを食おうかと思うが
これいかに！

武士①② は、はぁ・・・

時致 よし！（下カドカと歩いて将棋台に座る）

武士② あー！

武士 よっしゃー！（同時）

時致 ん？なんじゃ？（もぐもぐ）あ・・・悪い。

武士 いやいやいや、時致様いいんですよ！
将棋なんていつでも出来ますから！わっはっはっは。

時致 そ、そうか？

あ、この握り飯半分兄上にもあげよう。

気まずい感じで退場

武士 ほれほれ〇〇殿。今回は引き分けということでもたに
しようではないか。

武士② 今回「も」ではないか！いつもいつも何かしら
理由つけて逃げおって！（ハケ）

満 だ、大丈夫かしら・・・

（墓前の祐泰に手を合わせる）

満 祐泰様。騒がしくしてごめんなさい。え？構わないって？
ふふふ。あなたがそういう人だからこの部屋はいつも騒がしいんですよ？

祐泰様、あなたがいなくなつて
祐成、時致も健やかに育ち、もう手に余るくらい。

（蘇芳、静かに入ってきて控えている）

私一人じゃ荷が重すぎるじゃありませんか。私一人に任せて
酷い人ね。恨んでやるんだから・・・（涙を拭く）
ごめんなさい、賑やかなのが好きなのにね。

蘇芳 奥方様。

満 …っ。あら蘇芳。帰つたのですね。あの子達は？

蘇芳 は。無事見つけてきました。

満 そう。駄目ね、母親のくせに子供の行先も分からないようじゃ。

蘇芳 某も手を焼きました。

満 苦労かけるわね蘇芳。

蘇芳 い、いえ！そういう意味では。

満 ふふ冗談よ、ごめんなさい。

蘇芳、ご苦労様。下がって休んで。

蘇芳 は。では。

満 あなたは子供たちを見つけるのがうまかったですね。
せめてあの子達が隠れそうな場所を記した書を残してくれても
よかったですよ？だめね、しんみりしちゃう。
あなた・・・。

(また手を合わせて暗転)

一幕【五場】

伊藤祐親、家来数人がいる

祐親

ちっ。

(酒を飲み、杯を向ける)

遅い！(蹴る)

ちっ。まったく腹立たしいわ！

本来であればこのような田舎で暇をもてあそぶ身ではないというに。

さらに！追い打ちをかけるようにこの巻狩も弓のしなる音さえ聞く事叶わず！ええい！(家来蹴る)

家来

うぐ。

祐親

それにしても腹立たしいのは工藤祐経よ。

この祐親をこんな小さい河津の国に追いやり、おのれは伊東領ででかい面をしおって！

何故、何故、なにゆえ！

あの伊東の地を継ぐに相応しいのはワシぞ！

この伊東祐親ぞ！

先代が後妻の子を嫡子に向かい入れ、伊東領を継がせるなど！

正気の沙汰とは思えぬ！

何故、何故、なにゆえ！

(家来に振る)

家来

は・・・そ、それは・・・

祐親

かーーーーーっ！(殴る)

家来

ぐほ・・・

祐親

さらに、さらにさらに！ワシの娘の、お方も娶らせてやったにもかかわらず。お方は傍に置きこの祐親を厄介払いするなど

・ ・ ・
なにゆ ・ ・ ・ む！
いた！いたぞ獲物があ！漸く現れたのう！

（何度か構えるが、しつくりこない様）

おい。（顎で使う）

家来 は ・ ・ ・ は。（四つん這いになりその上に祐親が足を乗せる）

祐親 よし、よしよし ・ ・ ・ 動くなよお。

家来② 祐親様、河津祐泰様がお見えになりました。

祐親 ぬあああああ！（家来蹴る）

家来 ぬ、ぬおお ・ ・ ・ 。

祐泰 父上、あまり家来を泣かすものではありませんぞ。

祐親 ふんっ。

祐泰 それに御酒はお控えなされませ。お体に触ります。

祐親 どうせこの体がどうなろうとワシはこの河津の地で
細々と暮らす身。老い先短い人生を健やかに暮らす気など
ないわ！

祐泰 そう申されますな、私はこの河津の地が好きです。
山も海も近いこの地はのんびり暮らすには申し分ない。

祐親 お主、それでよいのか！？わしが伊東領を継いでおれば後に直系
であるお主が伊東領を継ぐはずなのだぞ？

祐泰 父上。私は広い領地など欲しくはございませぬ。
満、一萬丸、箱王丸、父上、そして仕えてくれる者が
いるこの地が私は好きなのです。

広い地では目の届かぬ事も御座いましょう。
(酒を煽ろうとする祐親を止める)

祐親
ふん！

祐泰
さ、もう日も暮れます故戻りましょう。

入れ替わりで家来③登場

家来③
祐親様！伊東領に潜らせておりました者より
書状が届きました。

祐親
む。動いたか！見せよ！

祐泰
父上、潜らせていた者とは？

祐親
くつくつくつく……ついに、ついにこの時がきたか。
祐経ええええ。伊東の地は返してもらおうぞ。
皆の者！戻るぞ！すぐに支度じゃ！
はははははは！

祐泰
父上？お待ちください！父上！

(暗転)

一幕【六場】

舞台中央に工藤祐経が座っている。

お万
よろしいですか？

祐経
万か、どうした。

お万
京へゆかれるとか。

祐経
ん？うむ。京の重盛様が舞や楽を好む方だな。
是非私の舞を見たいと仰ってな。

お万
まあ、それは良いことですわね。祐経様の評判は京にまで行き届いているのですね。

祐経
ははは。それは皮肉と受け取ってよいのか？

お万
あら、どうして？

祐経
一つの国を任されている武士が舞で京へのぼらされるなど滑稽だと笑っておるのではないか？

お万
あら、祐経様はわたくしを性の悪いおなごだと思つてらっしゃるのですね？

祐経
〔笑〕すまぬ。冗談だ。

お万
悪い冗談を申されますと私、へソを曲げてしまいますよ？

祐経
わ、悪かったもう言わぬから許してくれ。

お万
そうですね、許してあげてもよいのですが……。

祐経
おう、私に出来る事であれば何でもしよう。

お万
京には……。

祐経
ん？

お万
京にはさぞかし綺麗なお召し物があるのでしようねえ？

祐経
む？そうきたか。前言を撤回するでしょう。

お万
頼みましたよ？歌舞音曲一臈殿。

祐経
こやつ、まだいうか！（二人笑う）

祐経
お万、近こう。

祐経、お万を抱く

お万、お主には苦勞をかけるな。
父、祐親様のこと、よかったのか？

お万
何を申されます。私は祐経様のお側にお仕え出来て果報者で
ございます。

父は、この伊東の地のことしか頭にありませぬ。祐経様が
正式にこの地を継がれた後もあれやこれと口を出して。
血縁でない祐経様にこの地を取られたのが悔しいのです。
その上私を娶らせる事で厄介払い出来ぬようにまでして……。

祐経
分かっておったわ、祐親殿がそのように考えておることくらい。
だが、それでも私はそなたと共にいることを選んだのだ。

お万
祐経様。うれしゅうございます。
ただ一つ気がかりなのは……兄上の事です。

祐経
兄上？たしか河津祐泰殿であつたか。

お万
はい。兄上は父上が伊東の地に執着している事に気づき、
父上と共に河津の地で面倒を見ると言ってくれました。
兄上の優しさを思えば、申し訳ないと胸が痛みます。

祐経
左様であつたか。私からも礼を申さねば。

お万
祐経様、ありがとうございます。

家来
祐経様、お支度が整いましてございます。

祐経
うむ。すぐ参る。では、お万いつてくる。

(家来控えている。祐経だけハケ)

お万
はい。お気をつけて。

家来 お万様、よろしいでしょうか。

お万 どうしたのです？

(家来、お方に当て身で気絶させる)

お万 ……くっ！す、祐経様……。

火舐 (顔を出す)ねえ？やっちゃった？やっちゃった？？

家来 いえ、気絶しているだけです。

火舐 そうなんだあ、祐親のおっさんからは殺していいって
言われてんだけどなあ。

家来 火舐殿はどうしてこちらに？

火舐 いやじつとしてられなくてさあ。面白そうだから様子見に。

家来 火舐殿、今はまだ動かないほうが……。

火舐 それにしても祐親のおっさんも酷いひとだよねえ。
実の娘捨ててでもこの領地欲しいんだもんねえ。

家来 火舐殿！そんなこととりも早くここを離れましょう。

火舐 ねえ、もう俺らでやっちゃおうよ。祐親のおっさん来るまで
待てないよ俺。

家来 そんなめちやくちやな！

火舐 大丈夫だって、ここの大將さん大勢引き連れて出てっちゃったし
今なら手薄でしょ？

家来 手薄といってもざっと五百はいるんじゃないですか？

火舐　　ごひやくうく？うーん・・・
こりゃあ、無理だな！わっはははははは。

家来　　さ、火舐殿人に見つからぬうちに・・・

火舐　　ねえ見て。よく見たらこの娘かわいい。

家来　　人の話きけって！

火舐　　ほんとにこの娘あのおっさんの娘なの？

家来　　そうですよ！それに殺さずに生かしておいた方が、
万一の時に切り札になるでしょ？

火舐　　へええ、君いろいろ考えてんだねえ。

家来　　あなたよりはね！さ、いきますよ！

火舐　　へいへい・・・(あたりを嗅ぐ)
へへへ。争い事の良い臭いがしてきたなあ。(また嗅ぐ)
楽しくなってきたぜ。

(暗転)

一幕【七場】

河津の地

祐泰　　誰かある。

家来　　は。

祐泰　　私はこれより伊東領へ行く。馬を頼む。

家来　　は。お供いたします。

祐泰　　よい。私一人でいく。

家来 は？祐泰様おひとりで？危のうございます。

祐泰 なに、ちと挨拶がてら話をしてくるだけよ。すぐに戻る。

家来 かしこまりました。すぐに。(ハケ)

満 あなた、伊東へ？

祐泰 満か。うむ。祐経殿に会って父上を伊東の地に置いてはくれぬか頼みにな……。

満 しかし急ですわね。何か胸のつかえが？

祐泰 うむ……近頃父上がやたら伊東の地に執着しておつてな。父上の気持ちも分からなくもないが、このままでは取り返しつかぬ事が起こりそうで。父上があれほど祐経殿を目の敵にしておるのは厄介払いされたと思っておるからよ。だからせめて伊東の地におれば変な気は起こさぬと思つてな。

満 父上様……。しかし伊東にはお万殿もおられるのでしよう？いくら父上様でも。

祐泰 嫌な予感がするのじゃ。これがいらぬ懸念であることを確かめて来る。

満 あなた！

祐泰 案ずるな、すぐに戻る。

満 ……はい。(祐泰ハケ)
祐泰様、どうか御無事で……。 (満ハケ)

場面変わり伊東。

伊東領にて戦が始まっている。

火舐

ああああ、だめだあ。

こんなんじや収まらねえや。熱い。熱い熱い！

(数人切り伏せる)

ああ〜良い臭いだなあ。

家来

火舐殿、伊東祐親様到着されました。

祐親

火舐、ご苦勞。聞くところお方は生かしておいたそうだな。

家来

は。

祐親

連れてまいれ。

家来

ははっ。

祐親

火舐。お方は殺せと命じたはずだが？

火舐

え？いやあ。あの有能な家来君が万が一の時の切り札になるからって。

祐親

アホが！こうならない為に貴様を雇っておる！
父親を厄介払いする娘など親子でもなんでもないわ！

火舐

酷いねえ、相変わらず容赦ないね祐親のおっさんは。

祐親

ふん！

お万

離しなさい！この無礼者！

(登場)きゃ！・・・ち、父上？これは一体どういうことです！

祐親

お万久しいのう。お主の顔、もう見ることもないと思うたが、馬鹿な家来が生かしておいた故、再び合間見える事となったが。これも血の巡り合わせと思いい良しとする。

お万

なにを言っておられるのです！

こんなことをしてただで済むとお思いですか！

祐親
何を言うか、私はこの地を自らの手で取り戻した
だけの事。この地の正当な所有者はワシじゃ！

お万
この地は工藤祐経様の地です！早々に立ち去りなさい！

祐親
うるさい！（手を上げる）

お万
きやあ！！

・・・天罰が下りますぞ。

祐親
お万。せめてもの情けじゃ。祐経の事は忘れ、他の地で
ひっそりと暮らすというのであれば嫁ぎ先を決めてやっても
よいのだぞ・・・。

お万
私は・・・私は工藤祐経様の妻！誰のものにもなりません！

祐親
仕方ないのう。（刀を抜く）

火舐
いいのかい？

お万
鬼！あなたは、嫉妬の闇に負けた哀れな鬼よ！

（祐親お万を刺す）

お万
す、祐経様・・・。

祐親
ふふふふ、はははははははは！
漸くこの地が我が手に戻ってきたぞ！
（祐親、火舐笑いながらハケ）

舞台中央お万、その後ろで祐経が書状を読んでいる絵

お万
祐経様、ごめんなさい。この地を守る事ができなくて。
願わくば、あなたの腕の中で眠りたかった。
今は貴方に抱かれた心地が恋しゅうて体が泣いております。
あなた。祐経様・・・（事切れる）

祐絳
祐親あ・許さぬぞ。待っておれよ今にその首、
はねてくれようぞ。

(暗転)

【八場】

(祐親、酒を飲んでいる。傍で火舐横になっている)

祐親
(酒を煽り)やはり我が地で飲む酒は一味違うのお。

火舐、お前も一杯やれ。

火舐
いやあ、俺は酒は飲まねえんだ。

それに、人を斬ったこの感触で十分酔えるぜ。

祐親
ふ。おかしなやつだ。

火舐
しかし娘を殺し、その夫を追放し血で塗り替えたこの地に
なんの魅力があるんだい？
俺にはわからねえぜ。

祐親
血で塗り替えようとこの地はワシの地じや。

全てを犠牲にしても価値はある。

火舐
へへへへ。おっさん。あんた良い死に方しないぜ。

祐親
それはお前もだろう。それだけ血の臭いをまき散らしてるやつが
天国へ行けるわけもなからう。

火舐
へっ。地獄でも暴れてやるぜ。

(二人笑う)

祐泰
父上！

(登場)父上！これはどういうことです！

(火舐身構える)

祐親 火舐、よい。祐泰よう来た。ささそれに。

祐泰 何を言っておられる！祐経殿の不在を狙って攻め込まれるとは、気でも狂われたか！

火舐 おっさん！

祐親 火舐！お前は口を出すな。下がっておれ。

火舐 でもよ！

祐親 よいのじゃ。外で控えておれ。

（祐泰を睨みながらハケ）

祐泰 今の者は？

祐親 ワシが雇った人斬りじゃ。

祐泰 人斬り！？父上！正気とは思えぬ！そこまでしてこの伊東の地がほしいのか！

祐親 そうよ！この地はわしのものじゃ！

己の物を取り返して何が悪い！

祐泰 これからどうなさるおつもりです！祐経殿が知ったらただでは済みませぬぞ！

祐親 案ずるな。奴は今頃何も知らぬまま京で機嫌取りの舞でも楽しんでおることよ。気づいたころには帰る土地も妻もいない。

祐泰 妻も・・・？お方は、我が妹はどうしたのだ！

祐親 殺した。

祐泰 な・・・なんと！自分の娘を手にかけたと申すか！

祐親 あのようなもの娘ではないわ。夫と図つてワシを追い出しおつて。だから祐経にも同じ苦しみを味あわせてやるのよ！

祐泰 鬼に取りつかれたか。人の所業とは思えん！

(刀に手をかける)

火舐 おっさん！

(登場)おっさん……。

祐親 火舐？

火舐 すまねえおっさん。

(後ろから刀を突きつけて祐経登場)

祐親 お前は！なぜここに！

祐泰 祐経殿……。

祐経 祐親、よくも我が妻を亡き者にしてくれたな。

お方の仇、ここで討たせてもらう。

祐泰 祐経殿、待たれよ！

祐経 祐泰殿、そなたも同じじゃ！お方はそなたの妹ではないか！お方はそなたの事は常々気にかけておつた。父を押し付けて申し訳ないと！そんな心根の優しい妹をそなたは亡き者にしたのだ！

祐泰 違う！私は……

祐経 問答無用！そなたとはこのような形で会いたくはなかった。

祐泰 祐経殿……！

祐親 くくくく……。祐経。良い所に現れた。

ここで貴様を殺せばワシを邪魔する者は誰も

いなくなる！ふははははは！

祐経
外道め。

祐親
火舐！

火舐
おうよ！

火舐、隙をつき祐経の手から離れ斬ろうとするが、祐経に返されおのれの刀で刺される。

火舐
ぐほっ。

祐親
火舐え！

祐経
覚悟しろ祐親、すぐ後を追わせてやる。

火舐
お、おっさん・・・

祐親
火舐、よう働いてくれた。先に地獄で暴れておれ。
(火舐に刺さっている刀に手をかける)

火舐
な、なにを！

祐親
ワシはもうひと暴れしてからにするわ！
(刀抜く)

火舐
おのれえええええ！(ハケ)

祐親
祐経、お前こそお方が呼んでおる。はよう会ってやれ。

祐経
外道が！お万の名を呼ぶな！

(殺陣)

祐泰
父上！

祐泰殿！邪魔をするならそなたとて容赦せぬ！

祐泰殿、貴殿の悲しみこの祐泰痛いほど分かる！

祐泰殿、ならば何故お方を見殺しにした！

祐泰殿、それは違う！

祐泰殿、事ここに至れば最早どうでもよい！

私の中でお方が泣いておる。

無念じゃと！仇を討つてくれと！

私の中で泣き叫んでおるわ！

（殺陣）

家来殿、祐泰様！御助勢仕ります！

祐泰殿、うむ。

祐泰殿、く。このままでは・・・

祐泰殿、祐泰様！逃げるか！

祐泰殿、アホが！このようなどころで死ねぬのよ！

誰ぞ！誰ぞおらんのか！

（ハケ）

祐泰殿、父上！

祐泰殿、おのれ！逃がすものか！お前たちここは任せた！

家来殿、はは！

（祐泰ハケ）

祐泰殿、祐泰殿！

もう止められぬのか・・・。

家来

覚悟！

(殺陣、家来当て身をされる)

祐泰

許せ。

父上、父上！！

(ハケ、家来も追ってハケ)

祐親

はあはあ。おのれ。誰もおらんのか！
誰ぞ！誰ぞである！

火舐

おう。呼んだか？

(火舐、腹部に刀が刺さってる)

祐親

む？おお、火舐生きておったか。
頼む！助けてくれ。

火舐

はははは。生きておったかとお笑いだ。
見捨てておきながら尚助けを求めるとは・・・
やはり狂ってるぜ、おっさん。

祐親

悪かった！だから頼む！火舐。

お万

そうやってあなたは、掴まれた袖を何度振りほどいて
きたのでしょうか・・・

(同じく刀が刺さってる)

祐親

お、お前は・・・お万？
はは、ワシは夢をみておるのか。

火舐

さあおっさん。俺たちが案内するぜ。

お万

そうよ。あなたにお似合いの場所を。

祐親

な、なに？(お万に掴まれる)
なっ！何をする！離せ！

火舐

そら返すぜ。あんたが抜いた刀だ。

祐親 や、やめろおおお！

(火舐、お万笑いながら暗転)

祐経 ええい！祐親はどこだ！

祐泰 父上——！父上！

は、祐経殿。

祐経 祐泰殿……。

祐泰 祐経殿、どうか気を静めてくれ。

あのお方がこのような事望むはずがない！

祐経 黙れ！土地も奪われ、妻も亡き者にされた気持ち
が分かるか！

祐泰 祐経殿……

祐経 私を止めたいのならば道は一つしかない。

(構える)

祐泰 祐経殿……

(祐泰、意を決し構える)

(殺陣)

祐泰 勝負あつた。

祐経 殺せ。私にはもう生きる意味もない。

祐泰 何を申す。生きる意味などこれから探せば
よかろう！

祐経 祐泰殿、甘い。甘すぎるぞ！

祐泰 甘かろうが、私は信じる道を貫くのみ。

(出てきた家来に斬られる)

祐泰 うつく……

家来 祐経様！御無事にござりますか！

祐経 お、おう。

祐泰 祐経どの……私の死で償う。父の事許してはもらえないか。

祐経 まだそのような……。

家来 祐経様お下がりください！

祐経 よい。お前は祐親を探して参れ。

家来 は？ですが。

祐経 行け！

家来 はは！

祐泰 祐経どの……

満 あなた！祐泰様！

(満、登場)

祐泰 み、満！？何故ここにいる！

満 あなたが屋敷を出られてから嫌な予感がして……
いてもたってもいられず後を追ってまいりました。

祐泰 な、なんと無茶な……

満 おのれ祐経！我が夫になんの恨みがあるのです！

祐泰 や、やめよ満・

満 祐泰様は父、祐親が変な気を起こさぬ様あなたとお万殿が気がかりでこの地に出向かれたのです！

祐経 な、なんと・・・

満 夫の仇は妻の私が！

祐泰 やめよ満！うつく・・・！

(何度か斬りかかるが受け止められる)

祐経 祐泰殿のことは悪いと思うがこれも戦・・・だが、貴女まで死ぬことはない。

満 おのれ、まだ辱めを受けよと申すのか！
待て！祐経！

祐泰 満。もうよい。最期にそなたの顔を見てよかった。

満 最期・・・？な、なにを弱気な。
祐泰様らしくありません。

祐泰 はは。この怪我じゃ。もう助からん。

満 いや。祐泰様！

祐泰 先に逝く私を許してくれ。一萬丸、箱王丸を頼む。

満 祐泰様！いやです！いかないで！！

祐泰 満。ありがとう。

満 祐泰さまあぁー！！
(場面変わり屋敷)

祐成
母上。

(後ろに時致もいる)

満
は、祐泰さ・・・祐成？

祐成
ずいぶんうなされておっただ、大丈夫か？

満
昔の事を思い出していたら・・・ごめんなさい・・・
お願い！祐成。工藤祐経を討って！

祐成
は、母上？

満
祐泰様の事を思い出すだけで私は無念でなりません。
あの人は最期まで優しい人だった。でもその優しい人に
私は何もしてあげられなかった・・・。

祐成
母上・・・。

蘇芳
祐成様！時致様！はっ。ご無礼を！

祐成
いかが致した蘇芳？

蘇芳
は、工藤祐経の兵がこちらに向かってきております！

祐成
なに！

満
祐成！

祐成
蘇芳は母上を頼む！

蘇芳
は！祐成様は！

祐成
この里を守る！行くぞ時致！
蘇芳、お前も後から参れ！

蘇芳
はは！お供仕ります！さき、奥方様こちらに。

満 祐成、時致。あなた達まで逝くことは許しませんよ。

祐成 母上！私は河津祐泰が息子。
そう容易く死にませぬ。

時致 おう。母上心配するな！

蘇芳 さ、お早く。

（祐成、時致、意を決しハケ）
（殺陣）

二幕【二場】

祐成 母上！

満 祐成、無事で安心しました。

祐成 母上も、大事ないな？

満 私は平気です。時致は？

時致 おう、呼んだか母上。

満 よかった。蘇芳、二人を守ってくれてありがとう。

蘇芳 ははっ！

時致 しかし、祐経めこのところ攻めてくるのが多くなって
おらんか？

祐成 私もそれは思っておった・・・。

蘇芳 ・・・。

時致 その割には我らが迎えうつとすーつと兵を引きおる。

祐成 相手は大軍、こちらを攻め落とすは難しくはないはず。

満 何か考えがあつてのことだと？

祐成 いや、それは分からん。愛する妻を殺されて我が一族を恨んで兵を送ってくるのは分かるが、幾度となく攻めて来ては波が引くように逃げの繰り返し。そればかりか兵たちはどこで雇ったか分からぬような浪人ばかり。

時致 おのれ。我々を馬鹿にしておるのかのう！

祐成 遊んでいるようには見えないが・・・

蘇芳 あるいは誘っているのか・・・

祐成 ……

時致 もしそうなら望みどおり出向いてやるがな！

祐成 時致、落ち着け。迂闊に動いてはならん。

時致 しかし兄上！

蘇芳 お二人ともそのあたりで。もう日も落ちます。
(指を指す)
奥方様も、もう休まれては。

満 そうね。考えても仕方がないわね。

蘇芳 満様！危ない！

満 うっ！(満の胸に矢が刺さる)

祐成 母上！

時致 母上、しっかりせい！

満 祐成、時致・・・怪我はない・・・？

祐成 我らは無事じゃ！それより手当を！

満 よいのです。これで祐泰様の元へゆけます。

祐成 何を言っておる！蘇芳！血止めを持ってこい！

蘇芳 はは！

満 ふ、二人とも顔を良く見せておくれ。

時致 は、母上・・・。

満 二人とも大人になって・・・
よいですか。あなた達は下らぬ争いをせぬよう、二人仲よく
するのですよ？

祐成 母上、我らなら心配いらん。

時致 そうじゃ。今は我が身を気遣うのじゃ！

満 私はもうダメみたい。今思えばこうなる事を願っていたのかも
しれません・・・
祐泰様が亡くなってから今まで気を張りすぎていたわ。
どれだけ季節は繰り返してもあの人の香りは戻っては来ない。
心のどこかで、いつそ立ち止まってしまえば、と・・・
でも私が前へ進めたのは祐成、時致。
あなた達がいたからよ。

時致 母上・・・

祐成 母上、そう思うのなら逝くな！

満 ふふふ。もう大丈夫・・・
あなた達なら。立派な大人ですもの。
これで安心してあの人の元へいけます。

時致 いやじゃ、母上！しつかりせい！

満 (二人を抱きしめる)

あなた達はゆつくり、ゆーつくり後でいらつしやい
祐泰様と二人つきりにさせてね・・・

(力尽きる)

時致 母上！ははうええ！・・・そんな・・・。

祐成 祐経、許さぬぞ。父上と母上の仇必ず我らが・・・

(暗転)

二幕【二場】

暗い中軍議している様

武士 ここでこう攻めるのはどうか？

武士③ いやそこにはやつが待ち構えている。

武士 ではどうせよというのじゃ！いつまでもこの場で
手をこまねいておれと！？

武士③ そうは言っておらんが・・・

武士② さあどうするのじゃ。このままでは死に兵ぞ。

武士 やはり助けを呼ぶしか生き残る術はないのではないか？

武士③ 馬鹿な、我らに手を貸してくれる兵などあるものか！

武士 うーーん・・・

場が明るくなる。また将棋をしている。

武士② 相変わらず長考だのう。

武士 ええい！急かすな！拙者の次の一手を恐れてそうやって焦らせる作戦だな！

武士② はっ！これは言いがかりというもの。
某が恐れておるものはもつとほかに・・・

(辺りを見回す)
おい、しつかり見張っておれ。

武士 くおおお・・・うぬぬぬ・・・

武士② もう終わりでよいようじゃな。

武士 ま・・・まい・・・ま・・・

蘇芳 おうそなたら何をしておる。

武士② これは蘇芳殿。(身構える)方々安心なされよ蘇芳殿はあのような野蛮人とは違う。

蘇芳 野蛮人？

武士② いやいやいやこちらの話。あのような事があり不安と動揺を隠せぬので将棋でも指して気を落ち着かせようと。

蘇芳 なるほどのう、そうであつたか。

武士 ねええ、蘇芳さまぁん！ちよつとお知恵を拝借させてくださらない？

武士② おい！ずるいぞ！それになんで女言葉。

武士 ねー蘇芳さまぁ。

武士② きもちわるっ！

蘇芳 どれどれ。

時致 おーーーーい蘇芳ーーーー(声)

武士② は！香車がきた！

蘇芳 香車？

武士② 我が歩よ王を守れ！

武士③④ おう！

時致 おーーーーい、あれー蘇芳ーーーー？

蘇芳 時致様、わたくしはここに・・・

武士② 飛車はだまらっしゃい！

蘇芳 飛車？

時致 あれーーーー？声は聞こえたなあーーーー？

武士 おーい！進撃の香車！こっちだ！

武士② おい捨て駒！

武士 すっ・・・！

時致 いたあああ！

武士③④ わああああ！！

武士② ああ・・・我が歩達が！

武士 好機！運がこちらに微笑みかけてきおったわ！

飛車には気づかなかったみたいだな。

武士② 誘い手にあえて乗った、だと……。

蘇芳 うむ。良き一局であった。

武士② ま、待たれよ！も、もう一局！

蘇芳 すまぬ。所用がある故これにて。
また、いつか。(ハケ)

武士 ふっふっふ。まあ、次までにまた勉強してまいれよ。

武士② はい……。っておい！！貴様はおのれで勝ってから
言わんかい！

武士 ひい！も、もう冗談じゃないかあ。

(ハケ)

時致 兄上、ここにおったか。

祐成 おお時致ようここが分かったな。

時致 蘇芳に聞いたんじゃ。父上と母上の供養か？

祐成 蘇芳に？そうか。それもあるのだが神様をお願いを、な。

時致 なにをだ？

祐成 父と母の仇を討たせてくれと。

時致 兄上……。

祐成 時致、正直に申せば私は少し迷っておった。
父も母も亡くし、残されたのは我ら兄弟のみ。

我らだけで仇を討つことが出来るのか、と。
だから神頼みしにきたのよ。
願いが叶うなら仇を討たせてくれ、そしてそれが叶わぬなら
この神社を出たら私を蹴り殺してくれ、とな。

時致

兄上！ワシは兄上となら何でも出来る気がするぞ！
ワシは考えるのは苦手じゃが、兄上と共にどこへでも！

祐成

おお、我が弟。よう言うてくれた！
神にも勝る加勢よ！

時致

と、言うがタダで神頼み出来るならやって損はないな！

(二人手を合わせ祈る)

祐成

ちはやぶる 神の誓いの違わずは 親の敵に 逢う瀬結ばん

時致

天くだり 塵に交わる甲斐あれば 明日は敵に 逢う瀬結ばん

祐成

時致、父も母も亡くしたが、我ら兄弟最期まで一緒だ！

時致

この命、兄上にお預け申す！
兄上と共になら死など恐るるに足りぬ！

祐成

時致、この私と死んでくれるか！

時致

おう！母上には遅う参れと言われたが、時致は早う母上に
会いたくてかなわん！

祐成

ははは。では邪魔して母上を困らせてやろう。

時致

うははは、母上の顔が目には浮かぶのう！

祐成

よし。ではいくか！

時致

おう！

(神社から大きく一歩踏み出す、お互い顔を見合わせる)

(※)

二幕【三場】

富士裾野の地

時致 兄上、どこじゃ。

祐成 こつちじゃ時致。

時致 こう暗くては兄上はおろか、足元すら見えんわい。

祐成 よし、待て。(傘に火を灯し松明代わりにする)

時致 おお、兄上。傘に火をつけるとは考えたのう。

しかし、こんな山道通らずともよかつたのではないか？

祐成 今日のはな、この裾野の地で源頼朝様が巻狩をしておったのよ
祐経もこの巻狩に同行しておるそうだ、それ故かなりの数の兵が
いるはず。

時致 そ、それもそうか。

祐成 幸いこちらは我らのみ。闇夜に紛れば見つかりはせぬ。
今頃あやつらは酒を浴びるほど飲み、皆寝ておるだろうよ。

時致 そこへ我々が奇襲をかける！

時致 うむ。よおし腕がなるわい！

祐成 待て！

(武士数人現れる)

祐成 こやつら・・・

時致 (急に斬りかかられる)うわ！な、なにをする！

祐成 そなたら何者だ。

武士 ……。(構える)

祐成 答える気はなさそうだな。時致やるしかなさそうだ。
平気か？

時致 兄上こそ、死ぬなよ！

祐成 ふふ、その言葉を聞いて安心したぞ！

(殺陣)

時致 兄上、無事か？

祐成 ああ、大事ない。

時致 それにしてもあやつら問答無用で斬りかかって
きおって。我らの事をしっておるのか？

祐成 ……。

時致 兄上？

祐成 ん？ああ。時致、これより油断せず参るぞ！

時致 おう！

(二人ハケ)

二幕【四場】

祐経 なにやら騒がしいな。だれかある。

武士 はは。

祐経 この騒ぎはなんだ。

武士 は、なにやら曲者が紛れ込んでおるようで！

祐経 頼朝様を狙っておるのではあるまいな！
頼朝様の安否を確かめて参れ！

武士 はは、ではごめん！

(武士ハケ)

武士(声) うわあああああ！

祐経 なっ！

(祐成登場)

祐成 ん？その短刀は・・・母上の・・・
見つけたぞ！工藤祐経！
時致！

時致 おう！（登場）

祐経 騒ぎを起こしたのはお前達か。

祐成 母上と父上の仇取らせてもらう！

祐経 母、父、短刀・・・
そ、そうか。やはり来たのだな。

いつかはこの日が訪れるものと思っておった。
河津祐泰殿の倅達よ。

時致 やはり来た、だと？幾度となく我が地を襲い
ようそのような口が叩けるものよ！

祐経 なに？私がお前たちの地を？

時致 そうだ！そのせいで母上も失のうた。

祐経 なに、満殿は亡くなったのか・・・

祐成 ここへきてしらばつくれるか！
その母上の短刀が証だ！

祐経 こ、これは・・・。

時致 もはや問答は無用！覚悟しろ！

祐経 ま、待て！お前たちは思い違いをしておる！

祐成 刀を抜け！

祐経 うっ！致し方ない！

（殺陣）

祐経 く・・・はあはあ。

時致 兄上平気か？！

祐成 ・・・・ああ。

祐経 祐泰殿の倅達よ・・・すまなかつた。
あの時からずっと気がかりであった。
満殿の事が。

祐成　なにを今さら・・・
その手で我が父、母を殺しておきながら！

祐経　私は、伊東の地と妻を奪われ怒りに任せてそなたらの祖父である祐親を討とうとした。
しかし止めに来た祐泰殿を誤って斬ってしまった。
祐泰殿を殺したのは私だ。何も言い訳は申さぬ。
だが満殿の事は私ではない。
あれ以来満殿宛に文を何度も送っていたが返ってこなかった。
すまぬ、と一言言いたかったが・・・

祐成　そんな話は・・・。

時致　どうということじゃ・・・。

祐経　だが今さら何を言おうがもう遅い。
そう、遅すぎた・・・。
だが最後にこの短刀を返せてよかった。
これでよい、これで・・・。

(事切れる)

時致　あ、兄上？

祐成　なにかおかしい。祐経が嘘を言っておるようには思えん・・・。

武士(声)　曲者はどこだ！まだみつからんのか！

時致　兄上！まずはここを離れるぞ！

祐成　あ、ああ・・・。

蘇芳　祐成様、時致様！

時致　蘇芳？蘇芳ではないか！

祐成 蘇芳……。

蘇芳 ご無事でしたか。助けに参りました。

時致 蘇芳、来てくれたか！

祐成 待て、時致！

時致 兄上？

祐成 蘇芳。お前なぜここにいる？
なぜ我らがいることを知っている。

蘇芳 祐成様、なにを？

祐成 答えよ蘇芳。

時致 なにを言っているのだ兄上！
何故蘇芳を疑うような！

祐成 前々から気になっておった。
祐経は兵をこちらには送っておらんと言った、
しかし蘇芳、お前は言ったな祐経の兵がこちらに向かつて
おると。相手は浪人ばかりだった。何故祐経の兵だと分かった？

時致 す、蘇芳……。

祐成 それだけではない。我らの秘密の丘にもお前は現れた。
母上が死んだ時も。私が箱根権現にいった時もお前は知って
おった。そして今もお前は我らの前にいる。

蘇芳 ……。

時致 蘇芳、何故何も申さぬ！お主、祐経の間者だったのか！

祐成 それも違う。ここに攻め入った時皆戸惑っておった。

だが山道で襲ってきたやつらは問答無用で我らに斬りかかってきた。蘇芳が祐経の間者ならここの者達も我らに戸惑いなどしないはず。

蘇芳
ふふふふ。

時致
す、蘇芳？

蘇芳
よくぞ見破られました。流石祐泰殿の血を分かつ者よ。

時致
蘇芳おぬし……。

蘇芳
よくぞ、よくぞここまで参られた！お前達でなければ私の計画はこううまく運ばなかつただろう。

祐成
何故このような手の込んだことを！

蘇芳
領土拡大の為、祐経が邪魔だった。
だが……ただ奪ったのではワシがお咎めを受ける。
そこで目を付けたのがお前ら兄弟よ。
父を殺されてお前達は祐経を討つ理由がある。
祐経を殺したお前たちをワシが殺せば、この場を収めた
として祐経の伊豆を手に入れたとて誰も疑うまい。

祐成
その為に母上も手にかけたのか……。

蘇芳
そうだ。いくら父の仇というても弟は父の顔も知らん
兄はことのほか冷静ですぐには事を起こさん。
お前達には祐経を討つ理由が足らなかつたのだ。
それ故お前たちの大事なものを奪うことにより
お前たちの大義名分は成った！
ワシの手の中だな！

時致
うあああああ！（斬りかかる）

蘇芳 ふん。(受け止め蹴る)

時致 うぐ！

祐成 貴様、何者だ……。

蘇芳 ふふふ。父と母の土産に教えて差し上げよう。
我が名は！駿河守護職、北条時政！

祐成 北条時政……

時致 よくも、よくも我らを……許さん。

蘇芳 さあ、貴様らをここで殺し、ワシの物語も終演じゃ！
参れ。曾我十郎祐成、五郎時致！

祐・時 うおおおおお！！

殺陣

蘇芳 な、な……ばかな。

ワシはここで死ぬ訳には……
おのれえ、おのれええええ！！

祐成 時致、へいきか？

時致 ううう、お……おう、なんとかな。

祐成 早くここを出るぞ……

時致 おう。

四郎丸 (肩がぶつかりよろめく)つあ。申し訳ありません。

祐成 大丈夫か、こちらこそすまぬ。

四郎丸 いえ、曲者がうろついているみたいで

走っていたら・・・

祐成 ……そうか。あなたも早くここを離れるといい。

四郎丸 はい、そうします。

(差し出された手を引っ張り隠していた刀で刺す)

祐成 うぐっ！！

時致 兄上！兄上！しっかりしろ！おのれ！

祐成 う・・・く。時致逃げよ。

四郎丸 曲者、獲った。

(四郎丸手を上げる。武士数人登場)

武士 いたぞ！こつちだ、捕まえろ！

(二幕二場の形になる)

時致 おお、兄上。見よ…雁じゃ、雁の群れが見える。時致もすぐいく。兄弟仲良うあの雁のように…父上、母上は待っていてくれようかの…

祐成 お、おお・・・
時致、私にも見えるぞ、父上、母上も共におる。

時致 兄上、まこと母上に早すぎだと怒られるな。

祐成 は、はは・・・そうだな。
母上は怒ると怖いからなあ。

(祐成事切れる)

四郎丸

・・・。

時致

母上の事は兄上に任せて時致は逃げることに
するかのう？のう兄上？

兄上？・・・あにうえ。

武士

まさかこの騒ぎを起こしたのがたった二人だというのか。

武士②

もう逃げられんぞ！

武士③

このような騒ぎをおこしてただで済むと思うなよ！

時致は腰から赤木柄の短刀を出す

武士②

き、貴様！この期に及んで！

武士②

うっ(刀を向けられる)

時致

忘れるな。我ら兄弟の思いを。
笑え。大いに笑え。愚かな兄弟と笑え。
そして伝えよ。

武士ゆっくり刀を振り上げ暗転

【最終幕】

男

忠常殿ー、忠常殿。
おお、こちらにおいででしたか。

忠常

ん？どうした？

男

何をしているのです？

忠常

雁をな、見ておった。

男

雁を？

忠常 何用かの。

男 え？ああ、いやなにまた一指しいかがかと。(将棋)

忠常 はっはっは。よかろうよかろう。
受けて立つぞ。

女 あ、いた。四郎丸様。

男 おい、その名で呼ぶな。

忠常 よいよい。

女 またあの昔話聞かせてくださいまし。

忠常 はは、またか。

女 はい。あの切ない話を聞くとこう、胸が苦しくて。
でも頑張らなきゃって思うんです。

男 ほう、某も気になりますな。

忠常殿、お話下され。

忠常 いいともいいとも。

この話はこれから先も伝えていきたい。

いや、伝えていかねばならん。

この悲しい、だが強く生きた兄弟の話をな。

(何人が集まってくる)

今より少し前の話、曾我兄弟という二人の若者がいてな、
この話はその兄弟の敵討ちの物語じゃ・・・

(忠常が物語を語っていく中音楽が盛り上がり暗転)

終